

第二十八回法華經・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

中濃教篤師の業績と資料概要

戸田 教 徹

はじめに、お題目を三唱させていただきます。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

おはようございます。神奈川県小田原市本典寺修徒・戸田教徹と申します。宜しくお願い申し上げます。先ほどご紹介いただきました通り、私は現在、立正大学大学院博士課程に在籍しており、また立正大学日蓮教学研究所の研究生として、普段は大学におります。

昨年三月まで、現宗研で所員として働いておりまして、ちょうどその時に、このセミナーのサブテーマであります中濃教篤資料の整理を担当しておりましたので、こうして皆様の前で発表をさせていただいている次第です。

さて、本日は「中濃教篤師の業績と資料概要」という題目で発表をさせていただきますが、まず最初におことわりをしておきたいことは、残念ながら、私は中濃先生に直接お会いしたことはありません。ですから、資料整理や中濃先生の著作を通じて見た中濃教篤像について、お話しさせていただくことになりません。中濃先生と直接ご親交のあった方々が多くいらっしゃる中で恐縮ですが、あくまで現時点で私が捉えた中濃先生としてお聴きいただいて、また後ほど、「実際にはこういう方であった」、あるいは「内面的にはこういう人物であった」というような点があれば、

諸先輩方からは是非ともご教示いただきたいと思えます。

一方で、現在の宗門の中で、中濃教篤先生のことをあまりご存じでない方々も沢山いらっしゃるかと思えます。かくいう私もその一人であったわけですが、中濃先生の業績や著述を追っていきますと、中濃教篤という人物、そして中濃先生が遺されたものについて、もう少し宗門に広く知られていてもよいのではないかと、という思いももまれてくるところです。本日の発表は、中濃先生についてご紹介することを通じて、近現代宗門史、歴史の中に、中濃教篤という人物をどのように位置づけるか。先生の遺された文章や資料をどのように受け止め、活かしていくべきか。こういった点も意識して、お話しをできればと考えております。

一、中濃教篤先生の経歴

まずは中濃先生の略歴を概観していききたいと思います。別紙資料のとおり、非常に多くの事蹟を遺されておりますので、本日は二つの視点を軸に見ていききたいと思います。

一つ目は、「平和活動」という視点。ここでいう平和活動とは、反戦運動ですとか、原水爆廃絶運動、あるいは人権に関する活動など、一括して広い意味で平和活動としましたが、中濃先生の生涯の大部分は、この平和活動に費やされました。そして、その原点には妹尾義郎との出会いがあります。

妹尾義郎は、ご承知の通り、はじめ日蓮主義に傾倒し、後に仏教社会主義同盟を結成し仏教の革新運動を行い、そして平和活動に尽力した、近代仏教史上に名を残す人物であります。この妹尾が中濃先生に多大な影響を与えたようです。妹尾については、この後の大谷先生のご講演でより詳細なお話がいただけるかと思えます。

さて、中濃先生の平和活動は超宗派的な活動であり、宗門の立場から見れば「対外的」な活動が中心となります。そこで、もう一つの視点として「宗門人としての活動」があります。例としては、世界立正平和運動本部、現代宗教

研究所、人權対策室等の活動です。平和活動と重なる部分も少なくありませんが、宗内の事歴をもとに、宗門人としての中濃先生という面から見ていきたいと思えます。

それでは、別紙資料をご覧下さい。この資料は、はじめ『現代仏教』に掲載され、所報『現代宗教研究』三八号へ転載されたものに、追加・訂正を行ったものです。

冒頭から見ていきますと、一九二四年(大正十三年)三月、中濃先生は小田原でお生まれになりました。実は私も小田原の出身でございます。かつ名前に教の字がつく堀之内の関係ということで、個人的に非常に御縁を感じております。

一九三九年、一五歳頃、中学卒業前後で得度されます。そして一九四五年(昭和二〇年)五月、まさに終戦の直前に信行道場を修了され、本宗教師となります。

一九四六年、立正大学仏教学科を卒業され、「仏教社会(主義)同盟」に参加、ここで妹尾義郎と出会います。このことについては、中濃先生が編集責任を務められた『妹尾先生を偲んで』(妹尾義郎記念会、一九七四)に、中濃先生が書かれた文章がございますが、まさにこの出会いから、中濃先生と妹尾義郎は親交を深め、ともに平和活動を展開していくこととなります。年表中には記述がありませんが、一九四八年の「日蓮宗革新同盟」にも妹尾が関わっておりますし、翌年の「全国仏教革新連盟」では妹尾が委員長、中濃先生は中心メンバーとなっております。一九五一年にあります「宗教者平和運動協議会」結成推進も妹尾義郎と中濃先生が共に中心メンバーとなっております。さらに一九五三年「中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会」に常任幹事として参加とありますが、妹尾は中国人俘虜の遺骨送還運動を行っており、やはり関わりは続いているかと思えます。これは、中濃先生が妹尾の側にずっと付き従っていたという意味ではなく、中濃先生は中濃先生で平和活動に関する思いがあり、そのなかで妹尾の思想に共鳴するものがあつたということかと思いますが、中濃先生の活動初期に妹尾と出会ったことは、中濃先生の生涯に大きな影響

を与えたといつてよいかと思ひます。

一九五四年、「世界平和者日本会議」に参加。また日本平和委員会の役員を務めておられます。一九五五年「日中仏教交流懇談会」、これは先ほどの「中国人俘虜」関係活動の延長ともいえる会ですが、創立に関わり事務局長となります。

さて、ここまで見てきたとおり、中濃先生の平和活動は基本的に個人としての活動が先にあつたのですが、一九五五年、「日蓮宗世界立正平和運動本部」委員に就任されます。立正平和本部委員は宗門の事歴に残る事蹟であるという点から見れば、ここで初めて宗門人として平和活動がなされるわけですが、これ以降は中濃先生個人の想いだけでなく、宗門の意向も受けて平和活動を行つていくこととなります。

一九六四年六月、日蓮宗現代宗教研究所創立メンバーの一人として顧問に就任されます。宗門人としての中濃先生を語る上で、現宗研との関わりは重要でありますし、また現宗研の歴史にとつても、中濃先生の活動は意味を持つてくるのではないかと思ひます。

続いて一九六九年、創価学会の「言論出版妨害問題」追及のため結成された「言論・出版の自由にかんする懇談会」で活躍されます。中濃先生の、平和活動と並ぶもう一つの大きな事蹟として、近代宗教史の研究、とくに新宗教についての研究を多く遺されたことがあります。これも、後ほどお話しする現宗研の活動と重なる部分です。

一九七一年（昭和四十六年）八月、日蓮宗現代宗教研究所所長に就任。以後、昭和五四年に退任されるまで、八年間にわたり所長をお務めになります。中濃先生が所長をされていた八年間によつて、これ以降の現宗研の活動の方向性がある程度決まつていったような印象を受けます。詳しくはまた後ほどお話しいたします。

続いて一九七二年十月、『日蓮宗事典』の刊行委員に就任されます。『日蓮宗事典』は現在も使用される日蓮宗の基礎的文献であり、その編纂刊行に関わつていたことも、重要な事蹟と捉えてよいかと思ひます。また一九七七年、

『近代日蓮宗年表』編集委員に就任されます。こちらにも『日蓮宗事典』同様、日蓮宗の基礎資料でありまして、こういった資料を整えていただいた御陰で、現在我々が勉強や研究を進めることができるわけであります。

一九七九年(昭和五十四年)十二月、現宗研所長を退任され、引き続き顧問として活躍されます。

一九八二年六月、アメリカでの「第二回国連軍縮特別総会」へむけ、宗務総長特使として派遣されます。さらに一九八五年九月、立正平和の会理事長就任。本日も立正平和の会の皆様がおいでですが、世界立正平和運動以来続く、宗門内での平和活動の中濃先生が牽引されていたといつてよいかと思います。

一九八八年には日蓮宗人権委員会委員、そして一九九四年には人権対策室顧問に就任されます。本日はあまり触れることができませんが、人権問題も中濃先生の中心課題としてありました。そして二〇〇三年(平成十五年)四月三〇日、八〇歳で遷化されます。

さて、資料の一頁目に戻りまして、中濃先生の主要著書を確認していきます。ただいまみてきた内容が、研究成果として刊行されていることがわかります。『新興宗教の解剖』、『中国共産党の宗教政策——変貌する中国宗教——』、『信仰者の抵抗——宗教平和運動の歴史——』、『創価学会への教学的批判』、『近代日本への宗教と政治』等の近現代宗教史研究がなされています。ただ、中濃先生の意識としては、学問的研究者というよりは実践のための研究であるように見受けられます。実際に活動するということだけでなく、しっかりと理論的根柢を抑えることも重視していたことが窺えます。このことは、今回整理した膨大な資料からもわかります。

二、『所報』にみる中濃教篤師——現宗研における活動——

ここでは宗門人としての中濃先生、その一面として現宗研における活動について見ていきたいと思います。資料に提示いたしましたのは、現宗研『所報』に掲載された中濃先生の論稿および記事の一覧です。

一九六七年発行の第一号には「公明党・創価学会」、また二号には「本門仏立講」という論稿が掲載されます。続いて三号・四号には「妹尾義郎ノート」を執筆されています。

第五号、これは中濃先生が所長に就任されてから初めて発行された『所報』になりますが、執筆論文ではなく、第四回教化研究会議にて所長として挨拶した文面が掲載されています。ちなみに、本号より『所報』に『現代宗教研究』という書名が付されており、この書名変更の中濃所長の意向がどの程度反映されたかわかりませんが、この第五号から、現宗研の問題意識が少し変化したように思われます。具体的に言いますと、四号までは本尊観など、宗義や教学の中心問題に関する論稿が多く見られますが、五号以降は、現代の問題に関する論稿の割合が多くなって参ります。

そもそも、現宗研設立の趣旨、その時の問題意識が、「現代と日蓮宗」というところにありますので、現代的問題を扱っているという点では大きな変化とはいえません。しかし、現代化といっても初期と五号以降では少し質が異なるのではないかと思います。四号までの掲載論稿を見ますと、「本尊論再検討」や「宗学論」など、「宗義の現代化」に重点が置かれているように見受けられます。「現代における伝道」なども同様かと思えます。これが五号以降には、「農村寺院の問題」「公害問題」など、現代の社会問題を取り扱った掲載論稿の割合が増えます。これは、現宗研の問題意識がシフトしていったことの反映であるかと思いますが、その変化のタイミングが、中濃先生の所長就任と重なるということでございます。

中濃所長以前の歴代所長を振り返りますと、初代所長は宗教社会学者であり法華経に関する著書も多く著された久保田正文先生、第二代は日蓮教学研究者である茂田井教亨先生、第三代は教団史研究の宮崎英修先生、第四代は純粹宗学を提唱された室住一妙先生と、四名とも大学教授であり、いわゆる学者肌といえますか、学問研究者です。

これに対して中濃先生は、当然、研究者でもありますが、経歴からみてもわかるとおり、その根本は実践活動家気

質です。つまり、社会に向けた実践活動を行っていくための理論研究という意識が強かったのではないかと思います。そのような問題意識が、現宗研の方向性にも反映されたと考えてよいと思います。

さて、『現代宗教研究』に中濃先生の著述を見ますと、新宗教関係をはじめ、現代の社会問題、宗教問題、平和活動についての論稿、また所長、あるいは顧問として、教化研究会等で基調報告を行なった文章が掲載されております。

第二九号には「近現代の日蓮宗と他教団」中間報告」にプロジェクトメンバーとしてお名前が記載されます。このプロジェクトは、平成五年から三年にわたって行なわれ、その成果が『日蓮宗の近現代——他教団対応のあゆみ——』（日蓮宗宗務院、一九九六）として刊行されております。このプロジェクト終了後には「新宗教プロジェクト」が始まっており、中濃先生も所属されていたことが当時の現宗研事業報告から確認できます。また同じ号に「座談会 現宗研三十年の歩み」の参加者として、設立当時から現宗研の歴史を振り返り証言されています。

第三七号には「石川教張第九代現宗研所長を偲ぶ会」の呼びかけ人代表として記載されますが、その発行直後、二〇〇三年四月に遷化されており、第三八号には中濃先生を偲ぶ座談会の様子が掲載され、続く三九号には、当時の主任である伊藤立教師による「中濃教篤文庫 寄贈された近現代史資料」という短い文章と、当時作成された資料目録が掲載されました。

この「中濃教篤文庫 寄贈された近現代史資料」こそが、今回われわれが整理・目録化の作業を行いました「中濃教篤資料」であります。

三、現宗研所蔵「中濃教篤資料」について

なぜ、二〇〇三年に一度目録が掲載された資料を、今回改めて整理することになったのか。周辺事情も含めご説明

したいと思っています。

まずは資料整理を行なうことになった経緯です。二〇〇三年に中濃先生が遷化され、中濃教純上人より現宗研に中濃先生が収集された資料が寄贈されました。この時に、現宗研で資料の「一部」を整理し、所報第三九号に目録を掲載しました。「一部を」というのは第三九号に書かれています。

この時は書籍を中心に整理されたようで、その他の細かい資料については、ある程度まとめた上で、段ボールに収納し現宗研書庫に保管されました。この段ボールに保管した資料を整理する機会がなかなかとれず、そのまま保管されていたというのが実状でございます。私が入所した当時にも、正直いつてよくわからない段ボールがあるなあというぐらいの認識でした。今から考えれば非常にもったいなかったと反省しております。

その様な状況の中、二〇一五年、中国仏教関係の研究をされている坂井田先生から資料の閲覧希望のご連絡があり、実際にご覧いただいて、非常に貴重なものであるとのお言葉をいただきました。そこから話が動き出して、坂井田先生を通じて大谷先生に整理・目録化の相談をさせていただきました。

その結果として、二〇一六年四月から、大谷先生が研究代表、坂井田先生・永岡先生も研究分担をされております。科研究費研究「戦後日本の宗教者平和運動のトランスナショナル・ヒストリー研究」の一環として、三カ年の年限で整理作業が始まりました。本日の先生方のご講演は、その研究成果の報告でもあります。わたくしも僭越ながら、研究協力者という立場で名前を入れていただいておりますので、本日このような場に立っている訳でございます。現宗研は資料所蔵元として資料を提供し、そして研究員の方々にも整理作業にご協力いただいたところでございます。そして二〇一九年一月、整理作業が完了し、現在、目録の校正作業を継続中です。

次に資料の概要ですが、袋入り資料が四四八六点。これは、書籍以外の資料は個別に封筒に入れ、そこにNK（中濃）を頭文字にナンバリングを施し、情報をデータ入力していきました。NK番号でいえば、NK〇〇〇〇一からN

K〇四四八六まで、ナンバリングしたということです。

続いて書籍が一二六七冊。こちらは袋入り資料とは区別し、封筒に入れて書庫に配架しております。こちらはNK一〇〇〇一からNK一一二六七まで番号を付しました。袋入り資料と書籍を合わせて、計五七五三点となります。

たぐいまれの校正、確認作業中ですので、この点数は本日現在の数字です。

続いて資料種別としては、雑誌、雑誌切抜、冊子、書類、新聞切抜、新聞コピー、自筆メモ、自筆原稿、スクラップファイル、写真、書簡等に資料形態を分類し、入力しております。

資料内容としては、おおよそ①妹尾義郎関係、②平和運動関係、③新宗教関係、④人権問題関係、⑤アジア仏教関係、⑥その他、の六種に分類できるかと思えます。どれも中濃先生の活動、研究の基となった貴重な資料であります。

四、結び

まとめといたしまして、資料整理等を通じて見た私の中濃先生像を資料に提示いたしました。こちらを参照しつつ、宗門として遺すべき中濃先生の事蹟をもう一度振り返りたいと思います。

まず第一に、平和運動を中心とした実践活動家であったということ。そして、その原点には妹尾義郎の影響があり、妹尾との出会いが中濃先生の生涯を決定づけたともいえるかと思えます。また、実践活動が中濃先生の問題意識の中心にあり、活動の理論的背景として、資料収集と分析、研究を徹底したということ。資料の収集範囲の広範さや保管状態を見ると、「徹底した」という表現がまさにぴったりではないかというのが、整理作業を終えての実感です。続いて、現宗研に創生期から深く関わり、五代所長を務め、その後の現宗研の方向性に影響を与えたこと。さらに『近代日蓮宗年表』『日蓮宗事典』等、宗門の基礎資料編纂に尽力したこと。これは人物像ではありませんが、こういった点も宗門として残すべき重要な事蹟ですので敢えて記しました。そして、「近現代宗門史研究」の道を拓いたこ

と。宗門史の研究といえやはり中世・近世が中心であり、近代の研究者はまだまだ多くはありません。そのなかで、中濃先生は近代宗門史研究の先駆、貴重な先学のお一人であるということを書いておきたいと思います。

以上、大変雑駁ではございますが、私の発表を終えさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

中濃教篤師略歴

(作成にあたり「中濃自筆略年譜」(中濃教篤資料—NK〇一二八七)、『現代仏教』第二七八・二七九号(二チレン出版、二〇〇三)、『現代宗教研究』第三八号(日蓮宗現代宗教研究所、二〇〇四)を参照した。)

一九二四年(大正十三年)三月、神奈川県小田原市・御塔生福寺で、父・中濃教正、母ソメの長男として生まれる。

幼名・秀夫。大窪小学校から、立正中学校卒業。

一九三九年(昭和十四年)二月、中濃教正について得度。

一九四五年(昭和二十年)五月、第一期信行道場修了。

一九四六年(昭和二十一年)六月、秀夫を教篤と改名。九月、立正大学仏教学科を卒業。十二月、権僧都に叙任。この年結成された「仏教社会(主義)同盟(委員長・妹尾義郎)」に参加、妹尾義郎と知遇を得る。

一九四七年(昭和二十二年)二月、日蓮宗・領玄寺住職となる。

一九四八年(昭和二十三年)十二月、「日蓮宗革新同盟」結成に参加。機関紙『革新』の編集を行う。

一九四九年(昭和二十四年)四月、「全国仏教革新連盟(委員長・妹尾義郎)」の結成に参加。その中心的存在の一人となる。

一九五一年(昭和二十六年)二月、「仏教者平和懇談会(代表・壬生照順)」の結成に参加。七月、宗教者平和運動協議会の結成を推進。

一九五三年(昭和二十八年)二月、この年結成された「中国人俘虜殉難者慰霊実行委員会(委員長・大谷肇潤)」に、

常任幹事として参加。

一九五四年(昭和二九年)四月、日本山妙法寺提唱の「世界平和者日本会議」が開かれ、その中心メンバーとして参加。この頃、日本平和委員会の役員をつとめる。

一九五五年(昭和三〇年)七月、「日中仏教交流懇談会(会長・大谷盛潤)」を創立し、事務局長となる。八月、広島で開かれた「第一回原水爆禁止世界大会」に役員として増田管長とともに出席。以来しばらく、日本原水協の役員を務める。同月、大僧都叙任。十二月、「日蓮宗世界立正平和運動本部」委員となる。

一九五六年(昭和三十一年)八月、「第六次中国人殉難者遺骨捧持団(団長・田崎健作)」の秘書長として、興安丸で訪中。

一九五七年(昭和三二年)九月、「訪中日本仏教使節団(団長・高階瓏仙)」の副秘書長として訪中。周恩来総理と会見。天台山国清寺に日蓮聖人像を奉持。

一九五八年(昭和三十三年)二月、全日仏、新宗連、キリスト者平和の会などによって結成された「原水爆禁止宗教者懇話会」の事務責任者となる。

一九五九年(昭和三四年)十月、全日仏が伊勢神宮特別立法化反対のために組織した「宗教法人専門委員会」委員となる。十月、「国慶節祝賀訪中日本代表団(団長・片山哲)」の団員として訪中。毛沢東主席、周恩来総理と会見し、パンチェン・ラマと外国人としてはじめて単独会見をする。

一九六一年(昭和三十六年)七月、京都で開かれた「第一回世界宗教者平和会議」に参加し、起草委員を務める。

一九六二年(昭和三七年)四月、「日本宗教者平和協議会(会長・大西良慶)」が結成され、常任理事(国際担当)となる。

一九六三年(昭和三八年)四月、鑑真円寂千二百年を記念した「鑑真和上遺徳奉讃会」結成に努力し、その実質上の

事務責任者となる。十月、「鑑真和上慶讃日本仏教代表团（団長・金剛秀、顧問・大西良慶）」の副秘書長として訪中。周恩来総理と会見。北京で「十一地区国家仏教徒会議」（アメリカのベトナム侵略反対のため）が開かれ、起草委員を務める。

一九六四年（昭和三九年）三月、西川景文、大河内隆弘夫妻と訪中。六月、「日蓮宗現代宗教研究所」創立メンバーの一人として顧問に就任。七月、東京で開かれた「第二回世界宗教者平和会議」に参加、起草委員を務める。

一九六五年（昭和四〇年）十月、インドネシアで開かれた「外国軍事基地撤去のための国際会議」（KAPMA）に日本代表团（団長・平野義太郎）の秘書長として参加。スカルノ大統領と会見。

一九六七年（昭和四二年）三月、日本仏教界四十七師（大西良慶ら）による「アメリカの北爆即時・無条件・永久停止と民族自決権の尊重」を訴えた署名運動に参加。五月、権僧正に叙任。

一九六八年（昭和四三年）八月、全日仏、新宗連、日キ教団などで結成された「靖国神社問題連絡会議（議長・飯坂良明）」の世話人となる。

一九六九年（昭和四四年）十二月、創価学会の「言論出版妨害問題」追及のため結成された「言論・出版の自由に関する懇談会」で活躍。

一九七一年（昭和四六年）八月、「日蓮宗現代宗教研究所」所長に就任。十二月、「アジア仏教徒平和会議」（ABCP）の執行委員となり、モスクワでの会議に出席。

一九七二年（昭和四七年）一月、パリで開かれた「インドシナ諸国人民の平和と独立のためのパリ世界集会」に日本代表团（団長・古在由薫）として参加。四月、スリランカで開かれた「第二回 ABCP 会議」に、日本代表团（団長・壬生照順）として参加。バンダラナイケ大統領と会見後、インド仏蹟を巡拝。七月、東京で

開かれた「インドシナの平和と正義のための宗教者世界集会」に参加、起草委員をつとめる。十月、『日蓮宗事典』刊行委員となる。

一九七三年(昭和四八年) 二月、ローマで開かれた「ベトナムに関する緊急国際会議」に、日本代表团(团长・古在由重)として参加。

一九七四年(昭和四九年) 三月、モンゴル仏教センターの招きで、ウランバートルを訪問。ハンボラマ・ゴンボザツプ・モンゴル仏教会長と会談。十一月、インドで開かれた「第三回ABCPC会議」に、日本代表团員として参加し、起草委員を務め、ガンジー首相と会見。会議後インド仏蹟を巡拝。

一九七六年(昭和五一年) 七月、東京で開かれた「第四回ABCPC会議」で起草委員長を務める。

一九七七年(昭和五二年) 二月、『近代日蓮宗年表』編集委員。三月、「アジア仏教徒平和会議日本センター」の結成に努力し、常任世話人となる。同月、僧正に叙任。六月、モスクワで開かれた「恒久平和・軍縮・公平な諸国民間の関係をめざす世界宗教者活動者会議」に日本宗教代表团長として参加。十月、「核兵器廃絶をめざすNGO日本宗教者連絡会議(代表・大西良慶ら)」の結成に参加し、連絡委員となる。

一九七八年(昭和五三年) 九月、東京で開かれた「核兵器廃絶・軍縮をめざすアジア仏教徒の集い」で発題。

一九七九年(昭和五四年) 六月、モンゴルで開かれた「第五回ABCPC会議」に日本代表团として参加し、起草委員長をつとめる。これまでのABCPCへの功績により、ハンボラマ・ゴンボザツプ会長からメダルを受ける。十二月、日蓮宗現代宗教研究所長を退任。

一九八〇年(昭和五五年) 四月、日本仏教代表团長として、ベトナム、ラオス、カンボジアを友好訪問。

一九八一年(昭和五六年) 四月、東京で開かれた「軍備撤廃・核兵器廃絶をめざす世界宗教者集会」で起草委員長を務める。

一九八二年（昭和五七年）五月、モスクワで開かれた「核廃絶からなる聖なる生命を救うための世界宗教者活動者会議」に日本宗教代表団の団長として参加し、起草副委員長を務める。六月、アメリカでの「第二回国連軍縮特別総会」へむけ、宗務総長特使として派遣される（日本宗教代表団の副団長として）。八月、モンゴルで開かれた「第六回ABCPC会議」に日本代表団として参加。ABCPC執行委員を辞任。

一九八三年（昭和五八年）布教研修所講師。

一九八四年（昭和五九年）二月、「憲法改憲阻止各界連絡会議」の代表委員に選任される。

一九八五年（昭和六〇年）五月、日蓮宗東京北部宗務所協議員副議長に就任。九月、立正平和の会理事長に就任。

一九八八年（昭和六三年）十月、アジア仏教徒平和会議日本センター理事長に就任。日蓮宗人権委員会委員に就任。

一九八九年（平成元年）五月、日本宗教者平和協議会代表委員に就任。六月、アジア仏教徒平和会議副議長に就任。

十月、ベトナム・カンボジア仏教代表団歓迎委員会責任者。

一九九〇年（平成二年）三月、日本仏教代表団長としてベトナム、カンボジア訪問。四月、立正平和本部委員に就任。

六月、日蓮宗東京北部協議員会議長に就任。

一九九三年（平成五年）七月、人権対策室顧問。

一九九八年（平成一〇年）九月、「第六回ABCPC総会」モンゴルに日本代表団長として出席。

二〇〇三年（平成一五年）四月三〇日遷化。世寿八十歳。法号「眞厚院日輝上人」。